

=====

マンガみたいな (2019 年公演予定の長編劇作の為のパイロット版短編)

=====

・私 …藤本紗也香(試演版配役)
・お姉ちゃん／帯山さん／酔っぱらい …帯金ゆかり(試演版配役)

●お姉ちゃん①

お姉ちゃんが、旅行用のスーツケースに荷物を詰めている。楽しそう。
それを傍らに立って、見ている私。(私は、手にマンガ原稿を持っている)

私:……。

お姉ちゃん: ♪～

私:……

お姉ちゃん: どしたのー、そんなとこ突っ立って

私:……

お姉ちゃん: 座んなよ～

私: (首を降る)

お姉ちゃん: あ、そう。

私:……。

お姉ちゃん: 私ね、日本出るんだ

私: そっか

お姉ちゃん: そうなの

私:……。

お姉ちゃん: 手紙書くからさー。あと写真も。

私:……

お姉ちゃん: なに、暇なのあんた？ 手伝う？ 荷造り(笑)

私: お姉ちゃん

お姉ちゃん: なに？

私: 私が何で怒ってるかわかる？

お姉ちゃん: わかるよ

私: …わかるんだ？

お姉ちゃん: うん

私: 言ってみて

お姉ちゃん: わたしが、あんたが何で怒ってるかわかってないから

私: え？

お姉ちゃん: でしょ？ 違った？

私: …あってる

お姉ちゃん: ほら！ 当たった！ お姉ちゃん、あんたのことは何でもお見通しなんだから！

私:うーん…

お姉ちゃん:ほら、人生は短く、メ切まではもっと短い。そんなところで時間を無駄にしているの？

私:お前が言うなよ

お姉ちゃん:アハハハ、なにそれ超ウケる(笑)

私:…お姉ちゃん、私ね

お姉ちゃん:(ちょうど、荷造りが終わった)あ、ごめん、わたしもう行かないと

私:えっ？

お姉ちゃん:あんた、話が長いだよ、昔から(笑)

私:お姉ちゃん

お姉ちゃん:大丈夫、あんた可愛いから。これから先もずっと、みんなに良くしてもらえるよ。私が言うんだから、間違いなんてないって。

私:お姉ちゃん！

私のスマホが着信する。電話見る私、出たくない。

私、マンガの原稿を鞆にしまい、外着になる

お姉ちゃんは、帯山さん役に衣装を軽くチェンジ ⇒ 帯山さんが電話をかけている絵になる

● 帯山さん

私:もしもし

帯山:もしもし、藤川さん

私:はい

帯山:帯山です。今どこにいるんですか？

私:どこでしょう？

帯山さん:あの、藤川さん…ほんと困ります

私:うん

帯山さん:いや、だからですね、WEBの方とは違って、いやWEBの方もダメなんですけど、紙の本に載せるのは印刷所の都合もあって、間に合わなかったらもう載せられないんです、落ちるんですよ

私:聞いた

帯山さん:聞いたでしょ、私言ったもん、ね、目次と表紙にもう名前載っちゃってるんで、今さら落とせないんです、本誌デビュー作でいきなり落とすって、あってはならないですよ、困るんです、わたしめっちゃめっちゃ

私:ごめんね

帯山:ごめんじゃなくて…せっかく今まで二人三脚でやって来たんじゃないですか。本誌に載って、連載にして、単行本出しましょう？…って、あれ？…切れてる！(かけ直すが)うわっ電源切ってる！…こんちくしょー！

私:ああ…(頭を抱えて、しゃがみこみ)どうしたらいいんだ。…うー。うー。(間)…って、しててもしょうがないし。(周囲を見渡して)ここ、どこだろう。(スマホを取り出し)…オーケーGoogle。ここがどこだか教えて…グーグル？あ、今、電源切ったんだった。うーん…入れたら、かかって来るし。うーん…(しゃがみこむ)

●酔っぱらい

ネクタイのハチマキ、酒、おみやげ等を持った典型的な酔っぱらいが通りかかる

酔っぱらい: え…ちょっとお嬢さん？大丈夫

私: あ、はい、平気です、うーん

酔っぱらい: いや、なんかうなってるし

私: 大丈夫、フリだから

酔っぱらい: フリ？

私: そう。こうやって、困ったフリをしていると、アイデアが湧くんです

酔っぱらい: や、ちょっと何言ってるかわからないつつうか、え、ひょっとしてお嬢さん飲んでる？

私: 飲んでないです。おじさんこそ、絵に描いたような酔っぱらいですね。マンガみたい

酔っぱらい: いやいや、失礼だろ、それ笑 まあ、酔っぱらいだけれども！

私: フフフ

酔っぱらい: なんか、大丈夫そうだね。じゃ、おじさん行くから

私: はい、ありがとうございます。うーん(しゃがみこんで)

酔っぱらい: え、ちょ、だから、それ何？

私: 大丈夫なんで。うーん

酔っぱらい: いや、絶対大丈夫じゃないでしょ。ほんと、どうしたの、お嬢さん

私: 実は…追われてるんです、私

酔っぱらい: 追われてる？誰に？

私: 〆切に

酔っぱらい: ……

私: ……

酔っぱらい: …アハハハ！ああー！そう、わかった、なんかわかつちゃったよ、おじさん

私: わかつちやいましたか

酔っぱらい: お嬢さんはあれだ、作家さんだ、作家先生

私: いや、先生だなんて

酔っぱらい: やっぱり。え、何描いてるの

私: マンガを少々

酔っぱらい: ほほー、え、どんなの描いてるの？

私: 猫とかが出てくる話で

酔っぱらい: ほおほお

私: WEB で連載してるんですけど

酔っぱらい: ああーネットの。

私: はい、出版社さんがやってるサイトで。今度、そこが出してる月刊誌に、出張で載せてもらうことになったんですけど、その原稿の〆切が…昨日

酔っぱらい: ああー…できてないんだ

私: はい…

酔っぱらい: アチャー

私:ひひひ(目は笑ってない) どうしたらいいでしょう？

酔っぱらい:いやあ、おじさんに聞かれてもねえ…

私:だよー(しゃがんで)うーん

酔っぱらい:難儀な稼業だなあ…。まあ、でも普通に考えて、チャンスなんでしょ、その月刊誌だっけ？

私:大チャンス

酔っぱらい:じゃあ、無理にでも頑張らなきゃな。夢だったんでしょ、マンガ家になるのが

私:うーん

酔っぱらい:え、夢じゃないの？

私:私の夢じゃ、ないかな

酔っぱらい:はあ？じゃ誰の夢なの

私:誰だろう

酔っぱらい:いやいや、誰だろうって、ええ？ちょ、君はそんな、誰のかもわからない夢のために頑張ってるの？

私:誘われたんです、小学校の時。マンガ家になろうって

酔っぱらい:誰に？

私:お姉ちゃん

●お姉ちゃん②

お姉ちゃん、ノートに何か描いている

私:お姉ちゃん、ノート返して

お姉ちゃん:もうちょっと

私:自分のに描けばいいじゃん

お姉ちゃん:でもこれに描いちゃったし

私:勉強しないと

お姉ちゃん:勉強勉強って、あんたの人生それでいいの？

私:人生って。わたし、また小学生だよ

お姉ちゃん:何学生だろうが人生は人生でしょうが

私:そうだけど。来年受験だし

お姉ちゃん:ふーん。受験して、いい学校出て就職して、働いて働いてやがて死んで行くんだ？

私:嫌な言い方しないでよ

お姉ちゃん:結婚して子ども生んで幸せになって、ああー幸せで良かったーって言って死ぬんだ？

私:いいじゃん、それ。

お姉ちゃん:やだ

私:なんで？幸せなのに

お姉ちゃん:幸せになるために、なりたいものになれなくなるのはや

私:ん？…よくわかんないけど、もう塾行かないとだから。ノート返して。

お姉ちゃん:いいよ(ノートを差し出す)

私:(ノートを受け取ろうと手を出す、)

お姉ちゃん:(さっと、ノートを上に乗せて渡さず、)ただし、ひとつ条件がある

私:(うわ、来たよというすごく嫌な顔。を、した後)に)…何？

お姉ちゃん:あんた、わたしと組んでマンガ家になりなさい

私:……お姉ちゃん、またなんか読んだでしょ

お姉ちゃん:えへへ、わかるー？(「バクマン」1巻を出して見せる)

私:ああー！もう、すぐ影響される！それ、マンガだから

お姉ちゃん:そう！日本のマンガは世界に誇る文化なの！私達の生きた証、残そうぜ！マンガで！

私:だが断る！

お姉ちゃん:ハハハ、言うと思った(笑) まあ、気が変わったら考えてみてよ(ノートを手渡して、去っていく)

私:ええー？

私、ノートを開いてお姉ちゃんが描いたマンガを読む。しばらくして、

私:……やべえ。

●酔っぱらい

酔っぱらい:面白かったんだ？

私:面白かった、やばかった。

酔っぱらい:お姉さん、才能あったんだね

私:うん。ていうか、お姉ちゃん、マンガじゃなくても、勉強も運動も何でもできちゃう人だったけど

酔っぱらい:へえー

私:で、そのノートのマンガを、2人でペン入れして仕上げて、ブログに載せたら、結構人気が出て

酔っぱらい:ほおーそして2人は姉妹マンガ家として、ついにデビューにこぎつけると…。いや、泣かせるね。まんがロードだね。

私:うーん

酔っぱらい:あれ、違った？

私:いや、お姉ちゃんは、すぐ描くのやめちゃって

酔っぱらい:ええ？

私:お姉ちゃん、…ものすごい飽きっぽいから

●お姉ちゃん③

私:(しゃがみこんで)うーん…うーん、

お姉ちゃん:どしたの？

私:描けない、全然思いつかない

お姉ちゃん:あ、マンガ描いてんだ

私:うん。ていうか、お姉ちゃんもちよつとは、手伝ってよ！

お姉ちゃん:ええー、私忙しいし

私:元々お姉ちゃん作品でしょ

お姉ちゃん:そうだけど

私:最近、私しか描いてないじゃん

お姉ちゃん:うーん、じゃあ、もういっそアンタの名前で続けちゃってよ

私:ええー

お姉ちゃん:だって、やる気湧かないんだもん

私:そんなー

お姉ちゃん:だってアンタ、私がやる気あるときにちよちよいと描いたヤツと、やる気ない時に頑張って描いたヤツ、どっちが面白い？

私:…どっちも、私が全力で描いたやつより、面白い

お姉ちゃん:そんなことないと思うけど

私:わたし、才能ないし

お姉ちゃん:才能なんて、スポーツ選手にとっての身長とか体重と一緒にだよ。あればあったでいいけど、なければないでなんとかなるし、あったからってプロになれるかどうかの決め手にはならない。そりゃ、あるにこしたことはないけどさ。

私:それでも、お姉ちゃんが描いたやつより、面白くならない…

お姉ちゃん:じゃあ、やめたらいいじゃん

私:えっ？

お姉ちゃん:面白くないもの続けてもしょうがないでしょ

私:だけど、読者さんが

お姉ちゃん:大丈夫、今やめたって、マンガなんて星の数ほどあるんだから。みんな他のを読むわよ。だけど、あなたの人生はあなた一人のものでしょ

私:そうだけど

お姉ちゃん:人生は短いの。やりたくないこと続けて、本当にやりたいことをしないでいる時間なんてないんだよ

●酔っぱらい

私:うーん…

酔っぱらい:なるほどねー。まあ、お姉ちゃんの言うことも一理なくはないけど…誘っという自分がやめちゃうのは無責任だなあ(笑)

私:そう！無責任

酔っぱらい:だけど、それでもお嬢さん先生は、描くのやめなくて、今日まで一人で描き続けて来たんでしょ

私:うん

酔っぱらい:偉いよ

私:そうかなあ

酔っぱらい:偉い

私:へへへ…ありがとう

酔っぱらい:うんうん

私:…ちょっと、読んでみます？

酔っぱらい:え、マンガ？今、見れるの？

私:うん、これで(スマホ)

酔っぱらい:おおー見たい見たい

私:ちょっと待って、電源入れないと

電話の着信音

私: あっ…しまった、電源…うーん
酔っぱらい: え、出ないの
私: 編集さん
酔っぱらい: ああー。いや、でも出ないと
私: だよーねー…

● 帯山さん②

私: もしもし
帯山: もしもし、帯山です
私: この番号は、現在使われておりません。
帯山: おっと、間違えた。ってそんなわけあるか！
私: へへへ
帯山: 原稿、今、どういう状況なんですか？
私: いや、実は、もう 8 割方できて……
帯山: ないんですね？
私: うん…
帯山: まったく？
私: 困ったなあ…
帯山: いやいや、同情なんてしませんよ？ 描かない人が 100 ゼロで悪いです。自分で選んだ道でしょ？ 好きでやってるでしょ？ じゃあ、言い訳しちゃダメじゃないですか？
私: 正論言うんじゃねえ！
帯山: え？
私: 描けないもんは描けないんだから、しょうがないだろ！
帯山: あっ！ 切られた。もうー

● 酔っぱらい

私: ふう(電源から切った)
酔っぱらい: え、え？ いいの？ 切っちゃって
私: うん。だけど、ごめん、マンガ見せられないや。かかってきちゃうし
酔っぱらい: ああー別にいいけど。どんな話だったの？
私: 1 話が見開き 2 ページ完結で、私とお姉ちゃんと猫が出てきて
酔っぱらい: 何、お嬢さん先生自身がマンガに出てくるの？
私: そう！ …それで毎回、私とその猫を助けるためにひどいめにあうの
酔っぱらい: え、なんでまたそんな内容…
私: お姉ちゃんが、それ見せて私が嫌な顔するのが毎回楽しいって…

酔っぱらい: いじわるだな、お姉ちゃん

私: すごいじわる。だけど…今日は全然出てきてくれないんだ

酔っぱらい: 今日は？

私: うん

酔っぱらい: え、どこに？

私: ここに

酔っぱらい: んん？？

私: わたしね、今日みたいにアイデアに詰まると、敢えて寝るんだ

酔っぱらい: 敢えて寝る？

私: そう。どんなにメ切近くて切羽詰まっても、勇気を持って寝る。それで、うまくいくと、夢の中で、話の続きを教えもらえるの

酔っぱらい: へえー。何、こう目の前に、完成した原稿が出て来るの？

私: ううん、ほら、このマンガ、私自身が主人公だから、普通にお姉ちゃんと私と猫が出てきて、私がひどいめに合うだけ

酔っぱらい: それただの悪夢じゃん

私: うん(笑) うわー！ってうなされて、起きて、やった、描ける！って！

酔っぱらい: ノノノ、ひどい話だな

私: 夢の中で新キャラが出て来ることもあるんだよ

酔っぱらい: へえー

私: おじさんみたいな酔っぱらいとか、

酔っぱらい: あ、俺みたいの出てくんだ。

私: うん。わたしがひどいめにあうと、いつも出てきて助けてくれる

酔っぱらい: いい役どころだねえ

私: だからさ、なんか私、いつまで経っても自分一人で描いてる気がしないんだよね…、夢の中でお姉ちゃんが教えてくれた話を、私が作画してるだけって感覚で

酔っぱらい: 姉妹マンガ家だ

私: うん。もう、どのキャラ描いてても、なんかお姉ちゃんに見えてくるし

酔っぱらい: なるほどねー。じゃあさ、もう夜も遅いし、そろそろお嬢さん先生も家に帰って寝たらいいんじゃない？

私: ううん

酔っぱらい: だって、寝ると続き教えてくれるんでしょ

私: そうなんだけど…もうその必要ないみたい

酔っぱらい: え？

私: 私、わかつちゃったんで

酔っぱらい: 何を？

私: さっきさ、「私の夢じゃない」って言ったよね

酔っぱらい: え、ああ、マンガ家になるのが？

私: うん。だけど、違った。やっぱこれ、わたしの夢だった！

酔っぱらい: お？(嬉) や、そりゃそうだろう！一人で今日まで頑張ってきたんだ！それが自分の夢じゃないなんてわけがあるか

私: ううん、じゃなくて…これ(この場全体を指して)が全部、私の見てる夢なんだよ

酔っぱらい:これ、が？

私:そう。だって、最初からおかしいもん。さっきから、おじさんも、帯山さんも、全部お姉ちゃんが演じてるじゃん(酔っぱらいを指さしながら)

酔っぱらい:……

私:……

酔っぱらい:…アハハハ！ ああーもう、バレちゃったんじゃあしょうがない

私:へへへ

お姉ちゃん:さてと、今日はアンタに、どんなひどい目にあってもらおうかな

私:お手柔らかに！

●猫を助けるマンガ

お姉ちゃん:あ、猫だ

私:ほんとだ、猫だ

トラックが走ってくる音、キキーというブレーキ音

お姉ちゃん:あ！危ない！（と言って、私を突き飛ばす）

私:ええっ！？

私、道に転がり込んで猫を抱き上げる、迫ってくるトラック

私:あ、ちょ、え、ちょ、あ、はい！（猫をパス）

その後、迫ってくるトラックを、

私:うわー！

道に縦向きに平たく寝てタイヤとタイヤの間をすり抜けて回避

私:ふうー

と、安心したところに、自動車が突っ込んでくる音、跳ね飛ばされる私

私:ギヤー！

私:イテテテテ

お姉ちゃん:大丈夫～

私:ううー、痛い、全身のいろんなところが、イテ、イテテテ

お姉ちゃん:え、大丈夫？(笑) 病院行った方がよくない

私:だ、大丈夫だから、ね、猫、さわらして

お姉ちゃん:だーめ

私:う、ううう(泣) お母さん、飼っていいって言うかな

お姉ちゃん:うーん、どうかなあ。でもほら、お母さんもこの子の可愛い顔を見たら…って、可愛くなっ！え、ぶっさ！なんか、マンガみたいな顔してんじゃん！うっわ、助け損だ

私:助けたの私だけだね、あ、イタタタ、体のいろんなところがイタタタ、すごく痛い

お姉ちゃん:アハハハ、アンタの今の顔、この子にそっくりだね

私:え？

お姉ちゃん:なんか…マンガみたい

小粋な M がかかる

小粋な短い振り付けを踊る 2 人

その後、元の形に戻って止まる私

お姉ちゃんが、吹き出しを持ってきて、私がしゃべっているようにみせる

吹き出し「『マンガみたいな(仮)』」

吹き出し「2019 年 NICE STALKER 本公演にて」

吹き出し「上演予定です」

吹き出し「(たぶん)」

了